

「イエス様の歩みと救い」

皆さん、こんにちは。

きょうは、「イエス様の歩みと救い」という題目で、イエス様について、お話ししたいと思います。

イエス・キリスト

イエス様について、世の中で知らない人はあまりいないと思います。イエス・キリスト、約 2000 年前に、人類を救うメシヤとして来られた神の子だと多くの人々が認識し、クリスマスにはイエス様の誕生をお祝いしていますね。

イエス様の最期は、十字架の刑によるものでした。キリスト教会には、十字架や十字架にかかったイエス様が掲げられていて、イエス様を信じるクリスチャンの方々は、イエス様による十字架の救いを信じています。

きょうは、イエス様がどんな歩みをされた方だったのか、イエス様の十字架の救いとは何だったのか、その中心的内容をお話ししたいと思います。

はじめに、聖書から、イエス様が十字架にかかっていかれた時の様子を拝読します。

さて、イエスと共に刑を受けるために、ほかにふたりの犯罪人も引かれていった。されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけた。そのとき、イエスは言われた、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。人々はイエスの着物をくじ引きで分け合った。民衆は立って見ていた。役人たちもあざ笑って言った、「彼は他人を救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい」。兵卒どももイエスをののしり、近寄ってきて酔いぶどう酒をさし出して言った、「あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい」。イエスの上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札がかけてあった。

十字架にかけられた犯罪人のひとりが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と、イエスに悪口を言いつづけた。

もうひとりは、それをたしなめて言った、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。

時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及ん

だ。そして聖所の幕がまん中から裂けた。そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。

（『新約聖書』ルカによる福音書 第 23 章 32～46 節）

イエス様はなぜ十字架にかかれたのか

イエス様は、なぜ十字架にかかれたのでしょうか？

そもそも十字架の刑とは、当時のローマ帝国の時代におこなわれていた死刑の方法であり、最も重い罪を犯した人に科せられるものでした。

先ほどの聖句のように、イエス様と一緒に十字架にかけられた犯罪人が二人いました。その二人は、聖書では「強盗」と書かれています。十字架にかけられる罪状がはっきりとあったのです。

それでは、イエス様は何の罪で十字架にかけられたのでしょうか？ イエス様は、盗みもしていないし、殺人もしていません。ご自身は何の罪も犯していないのです。それなのになぜ、最も重い罪を犯した人が科される十字架の刑を受けられたのでしょうか。

イエス様の十字架、それは人々から、罪を着せられたということでした。ユダヤ人たちの不信によって罪を着せられて、そのせいで、十字架にかかれたのです。

神の子として来られたイエス様であったのに、十字架にかかっている時のイエス様の立場は、栄光なる神の子ではなく、罪人（つみびと）の立場でした。

ところが、キリスト教ではそのことを「十字架の贖罪」と言っています。だから、イエス様を信じる方々は、自分自身の罪のゆえに、イエス様が十字架で亡くなられたということを信じ、その十字架によって人類や自分自身が救われていると、信じているのです。

イエス様は十字架にかかるべきではなかった

それでは、イエス様は、はじめから人類の罪を贖うために、十字架にかかるために、来られた方なのでしょうか？

そうではありません。イエス様は、本当は十字架にかかるのではなく、人類の真の父母にならなければなりませんでした。

真の母となる女性を迎えて結婚し、神様を代身する人類の真の父母になって、人々を罪の子から神の子へと生み変えていくことが、天の願いだったのです。ユダヤ民族、そしてローマ帝国、世界へと、その祝福を広げていくはずでした。たった 33 歳の若さでこの世を去るはずではありませんでした。

しかし、人々がイエス様を信じることができず、一つになることができなかったために、イエス様は罪を着せられ、十字架の道を行かざるを得ませんでした。

そのような天の願いと使命を持って歩まれたイエス様は、どんな心情でいらっしゃったのでしょうか。真のお父様は、イエス様の立場と心情を、次のように教えてくださっています。

その当時におきまして、イエス様の奇跡に会い、あるいはパンの切れを貰って食うのを楽しみにして、後をついて来た人もおるかもしれない。千々万々のいろいろな人々は、自分の欲望を満たさんがためにいつも集った人は多いんだけど、イエス様の本当の心情を知り、心情に合う…そういう一人がないから、そういう家庭がある筈がない。家庭がなければ、もちろん民族も国家もあり得ないという。そうしてイエス様は悲惨な、可哀想な、惨めな、言うに言えざる、辛い立場でもって生涯を過ごしたということを私たちは知らなければならない。

（『日本統一運動史』195 ページ、1965. 1. 31）

イエス様が貫いた真の愛

そうして、結果的に十字架の道を行かざるを得なくなった時、イエス様はどのような心情だったのでしょうか。続けて、お父様のみ言から学びたいと思います。

切実な心情をもって任せられた使命を完遂するために、無限に努力したにもかかわらず、結局は十字架にかかるようになったイエス様の姿を見つめられる、神様の悲しい心情を感じなければなりません。イエス様には、万民を身代わりし、全宇宙を身代わりして神様の悲しみを解いてさしあげ、神様のみ旨を成就してサタンを屈服させなければならない使命がありましたが、不信する群れから、あちらで追われ、こちらで追われて、結局はゴルゴタ山上で十字架にかかるようになりました。このようなイエス様の心情は、どうだったのでしょうか。

自らを中心として約束されていたすべてのみ旨が破壊されてしまい、自らの一生が、結局は十字架の刑に帰結することを感じたイエス様でしたが、それでもイエス様は最後まで天を裏切らず、天に対する忠誠の道理を果たされました。すべての人間がイエス様を不信しましたが、イエス様はそのようなこととは関係をもたず、天倫に向かうその道を一生の目標にして進んでいったということです。そのようなイエス様の一生が、人間にとって歴史的な希望の道となりました。

（天一国経典『天聖經』63 ページ、第一篇 神様、第二章 心情と真の愛の神様、第一節 心情の神様、23）

真のお父様に、「イエス様はどのようなお方でしたか？」と質問した方がいました。その時、お父様は、真剣な表情で、涙を流されながら、「あの男は、かわいそうな男だったよ」とおっしゃったと言います。

神様の、人類を思う心情を悟り、人類を救うという決意を持って人々を愛していかれたのに、そのすべての人から裏切られ、孤独の絶頂に立ったイエス様の心は、どれほど、張り裂

けそうな、悲痛なものだったのでしょうか。

それでも、イエス様は最後まで人類を救おうとする道を貫かれました。その絶頂の瞬間の言葉が、最初に拝読した聖句の中にある「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」という祈りでした。

十字架の救いとは何だったのか

それでは、十字架の救いとは、一体何だったのでしょうか？

イエス様が十字架にかかったことで、人々の罪は贖われて、人類は救われたのでしょうか？

救いの摂理は、イエス様が十字架にかかれたその時に完了したものではありません。十字架の救いとは、霊的救いであり、「人類が神様の養子になるための道が開かれた」ということです。

イエス様は、十字架上で、100%相手のために自分を犠牲にするという、真の愛の実体を示し、霊的復活をされました。その愛の基準は、人類歴史上、初めて表現された真の愛の基準でした。それまで真の愛を知らなかった人類が、イエス様の霊的実体を通して、真の愛が何なのかを知ることができるようになったのです。

つまり、「道が開かれた」というのは、「霊的メシヤの真の愛を相続できるようになった」ということです。

ゆえに、私たちは、イエス様の生き様を通して、その真の愛を学び、真の愛を自分がおこなうことができるように相続していくことができるのです。

愛は許しである

イエス様が示してくださった真の愛、その本質は、許しでした。

どんなに憎らしい相手でも許すことができる愛、それが真の愛です。イエス様は、「汝の敵を愛せよ」と教えていらっしゃいました。

私たちは、イエス様に倣って、許す人生を志しましょう。友人に対して、親に対して、自分を取り巻く状況に対して、腹が立つことがあると思います。時には、どう考えても理不尽に思えることもあるでしょう。そのような時、イエス様を、また真の父母様を、そして神様を、思ってみてください。

イエス様が置かれた状況は、理不尽の極みでした。それでも、怒ったり裁いたりすることなく、「彼らは何をしているか、わからずにいるのです」と、許し、とりなしていきました。その状況の背後にある、天の事情を知っておられたからです。

私たちも、その状況の背後にある事情を考え、怒りの感情に自身が支配されることなく、許しの愛を選択する努力をしていきましょう。

最後に、イエス様の言葉を共有して、説教を終わります。

『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるだろうか。そのようなことは取税人でもするではないか。兄弟だけにあいさつをしたからとて、なんのすぐれた事をしているだろうか。そのようなことは異邦人でもしているではないか。それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となちなさい。

（『新約聖書』マタイによる福音書 第5章 43～48節）

きょうは、「イエス様の歩みと救い」という題目で、お話ししました。
以上で説教を終わります。ありがとうございました。